



Special Features / Engineering's Heritage V Creating Japan

美に隠された先端技術「兼六園」

石川県金沢市



基礎地盤コンサルタンツ株式会社/関東支社営業部/次長
米岡 威
YONEOKA Takeshi

特集
土木遺産V
日本の国づくりの心

1—水の無い台地に造られた曲水庭園

加賀百万石の城下町として知られる金沢は、人口45万人の北陸の中心都市である。この地を治めた江戸幕府で最大の石高を誇る前田家は、代々藩主の巧みな政治手腕により江戸幕府の盟友として君臨し、幕末までも見事に切り抜けた。その長い歴史の中で執られた「文化政策」の下で発達した芸術と技能は、現在も高く評価され、今も発展し続けている。そして前田家の庭園である兼六園は街の象徴的存在となっている。

庭園は、東南方向から市街地の中心部に迫り出す小立野台地と呼ばれる河岸段丘の先端部にあり、段丘の麓を犀川と浅野川が平行に取り囲んで流れている。中心市街地に面した入り口から、緩やかな勾配をみせる真弓坂を瓢池を左に眺めつつ木立に囲まれながら登ってゆくと、パッと視界が開け目前に大きな霞ヶ池が広がる。僅かに起伏のある平坦地を縫うように曲水が流れ、その向こう側の崖の先には卯辰山の眺望がある。左手には同じ標高に金沢城跡と石川門が見える。

しかしこの美しい景色に単純な疑問が沸く。単に城に付属する鑑賞用の庭園であれば見下ろせた方が城内からの景観は良い。また段丘を降りれば周囲の河川から取水先も簡単に求めることもできる。なぜ城と同じ標高の水の無い台地に曲水庭園があり、水はどこから来ているのだろうか。

2—六勝をすべて兼ね備えた庭

114,000m²を有する兼六園は、水戸の偕楽園、岡山の後楽園とならぶ日本三名園の一つに数えられ、江戸時代の代表的な大名庭園として有名である。四季折々の美しさを楽しむ庭園として、国内はもとより世界各国の観光客に親しまれ、北陸観光の中心的な役割を担っている。



写真1—松平定信の書を写したとされる兼六園命名の額(石川県立伝統産業工芸館蔵)



写真2—兼六園内の山崎山の辰日用水放流口



写真3—雁の飛翔の姿を模した雁行橋



写真4—ライトアップされた荘厳な石川門

兼六園の名称は、1822年(文政5年)奥州白河藩主松平樂翁定信が12代加賀藩主前田齊広の依頼を受けて、中国の宋時代の詩人李格非の『洛陽名園記』にある「湖園」の章に「洛人云う園圃の勝 相兼ねる能わざるは六宏大を務るは幽邃少なし 人力勝るは蒼古少なし 水泉多きは眺望難し 此の六を兼ねるは 惟湖園のみ」と記された、相反する六勝をすべて兼ね備えた庭として命名したと伝えられる。しかしその頃の兼六園は現在の姿とはほど遠く、六勝を兼ねた庭園とは言い難いものであったらしい。命名時、定信は加賀を訪れていない事が判っており、庭の姿も見ずに名付けたようだ。それ故か命名当時はこの名称は使われず、庭の発祥にちなんで「蓮池庭」と呼ばれた。「兼六園」と一般的に呼ばれるのは明治に入ってからである。

3—蓮池庭から兼六園へ

兼六園は、初代加賀藩主・前田利家の金沢入城から現在に至る約420年の間に、いく度かの大きな変遷を遂げている。その背景には、加賀藩が最大の外様大名であったことから、何時攻め込まれても反撃できる防御を取り続けねばならなかった実情がある。通説による兼六園作庭のはじまりは、1676年(延宝4年)に5代藩主綱紀が金沢城に面した傾斜地、現在の百軒堀の辺りに自分の別荘「蓮池御殿」を建て、周囲に数奇屋(茶室)と一体化した庭を造り、自身の清遊や老臣との宴に活用した時とされる。この場所は庭を作る以前より蓮が多く自生していたことから「蓮池庭」と呼ばれた。

前田家は庭園の基本設計を1630年(寛永7年)頃に、茶道指南役であった小堀遠州へ依頼する。実際に施工を担当したのは、その弟子の賢庭であるらしい。その後は賢庭の直系にあたる流派が代々に渡って、藩主の意を汲み取りながら、一貫した思想で造園を手掛けた。

時は過ぎ、1759年(宝暦9年)に発生した大火により、前田

家は金沢城と共に蓮池庭の大部分を焼失する。暫くして11代藩主治脩が1773年(安永2年)から再建を開始。翌年には翠滝と夕顔亭に加え内橋亭を造り、現在の兼六園の北側部分の整備が完了する。その後、この蓮池庭上部の段丘面、現在の千歳台周辺で兼六園の北側半分敷地に相当するところに、二つの藩校「明倫堂」と「経武館」を建造して治脩は他界する。これを継いだ12代藩主齊広は藩校を移転させ、広大な跡地に自らの荘厳な隠居所「竹澤御殿」を建造したうえで、先述のとおり定信から「兼六園」の名称を授かる。

兼六園が現在の形に落ち着くのは、13代藩主齊泰が父齊広の死後に竹澤御殿を取り壊し、跡地に大きな池を掘り、銘木を配し曲水を廻して1851年(嘉永4年)に蓮池庭と一体化してからである。亀島、唐崎松、琵琶湖に似た瓢箪池。齊泰はここに都の地「近江八景」を模し、思いを馳せたのだろうか。

その後、明治時代に入ると金沢城内が陸軍の駐屯地となったことで園路の一部が強制的に切り開かれた。戦後に入ってから、管理を引き継いだ金沢市によって幾度と無く改修が繰り返され、議論の末の入園有料化が実施され今日に至っている。

4—外郭としての築庭の歴史

これら繰り返された藩校や御殿の建造解体と作庭は、一見すると場当たりの見えるが、実は大きな意味を持つ。兼六園は金沢城の裏門である石川門に接する位置にあり、その先は平坦な小立野台地に繋がる。外敵が城内へ容易に侵入できるため、前田家はこの地を重要



写真5—日本庭園最古の噴水



写真6—水音が最大になるように設計された翠滝と瓢池



■写真7—壁面の風化が進む素掘りの辰巳用水暗渠部 ■写真8—現在の辰巳用水東岩取水口 ■写真9—藩士が用水監視で行き交った測道と辰巳用水

な防備拠点とした。石川門が正門に比べて堅固な構造である理由もここにある。兼六園の位置に防衛拠点を築きたいが、軍事施設を作れば幕府への反目とみなされ苦境に立つ。外様大名である前田家は幕府の盟友でありながら防備を固める両面策を代々取り続けた。つまり藩校や御殿は、金沢城の前城の役割を持っていたのである。文献『金城深秘録』には「一、蓮池干揚地(共にいまの兼六園)外郭也。…」[一、蓮池御庭専御慰所之様に人々奉存候得共、全く左様にては御座有間敷…、足場悪敷様御泉水(庭)も被仰付候儀、是又御奥意深き御儀歟。…」とある。外郭として足場の悪い庭を造れとの指示である。

廻遊式庭園の池は簡単に越えられない堀、曲水は足場の悪い湿地である。池と曲水を渡るの一枚石を渡しただけの簡単な橋で、有事の際はすぐに撤去できる。兼六園の水は水門を通して内堀へ注がれ、園内の池と曲水は堰石を一個外すだけで内堀の水位を急激に上昇させる上池として、噴水は水頭圧・貯水水位のモニタリング装置として活用できる。瓢池に注ぐ翠滝は形状を布状にして滝壺を作らず、わざと大きな水音がするようにし、それを眺める夕顔亭では、室外から中の会話が聞き取れない配慮がされている。兼六園は軍事施設であることが裏づけられそうである。

5—日本庭園の原点に沿った造園思想

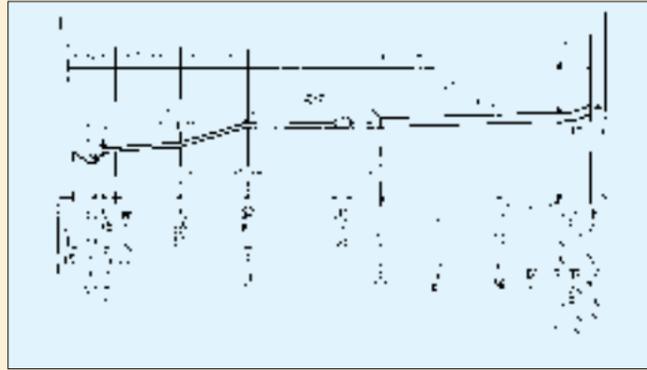
兼六園は「廻遊式」の要素を取り入れながら、様々な時代の庭園手法をも駆使して軍備の機能を巧みに隠し、総合的につくられた庭といえる。廻遊式とは、寺の方丈や御殿の書院から見て楽しむ座観式の庭園ではなく、土地の広さを最大限活かして、庭のなかに大きな池を穿ち、築山を築き、御亭や茶屋を点在させ、それらに立ち寄りながら全体を遊覧できる庭園をいう。これらの手法は、1100年頃の平安時代後期に書かれた最古の日本庭園の造園書である『作庭記』に記されている。同書は計画立案から設計・施工に至る基本的な手法に加えて、繁栄を願う風水の要素も加味された当時の庭師たちのバイブルであった。この『作庭記』を若い頃の綱紀が写本している。これは今も前田本と呼ばれ、唯一現存する作庭記

として金沢の美術商によって大切に保管されている。兼六園には異種類の双木の松が多用され、鶴嶋島には陰陽石と相生松、五重塔を配し、北には白虎の碑が置かれるなど、綱紀が同書を熟知し後世に伝える事で、代々の藩主が風土の特徴を織り込みながら、一族の繁栄と永続の祈りを随所に込めて細かな指示を出していた事が推察される。風合いの柔らかな金沢特産の「戸室石(斜方輝石角閃安山岩)」をふんだんに用いて、雁行橋や徹軒灯籠、虹橋(別名琴橋)など斬新な意匠は心憎いばかりである。さらに動力ポンプのない時代に、すぐれた眺望の高台で曲水の美を実現し、日本庭園では他に無い噴水を取り入れるなど、水泉・眺望を兼ね備え、今も機能し続けているところに、兼六園の大きな価値がある。そしてこの全ての水を賄ったのがもうひとつの土木遺産「辰巳用水」である。

6—技術の粋が注ぎこまれた辰巳用水

1631年(寛永8年)に金沢城と街の大半が大火で焼失した。3代藩主利常は防火用水の名目で幕府へ工事を申請し、翌年に能登千枚田の用水技師とされる板屋兵四郎に命じ、民衆を使って工事に着手した。脆弱な地質を迂回しながら僅か1年足らずで完成させた。その全容は伏せられ不明であったが、最近の調査結果によれば、犀川上流約10kmに設置された取水口から兼六園までの水路の平均勾配は100分の4以下。うち4kmあまりが暗渠で、最も緩やかな勾配は600分の1である。屈曲部や暗渠部では水路を拡幅し直線部では狭め、流速を落とさず土砂を溜めない細かな工夫が駆使されている。さらに兼六園内で水路を暗渠で分岐し大規模な伏越の理(逆サイフォンの原理)を使って金沢城に水を引いた。兵四郎の緻密で高度な技術と大胆な発想力に驚嘆する。

一方で辰巳用水建設は、火災直後の貧困に喘ぐ民衆の失業対策と水田開発も兼ねた事業でもあった。近代になって用水には生活雑排水が入るようになったため、1922年(大正11年)には途中の犀川浄水場地点より市街地内をほぼ同ルートで専用管が兼六園まで引かれた。兼六園へ引かれた用水は近江町用水に注がれ、市街地を巡る用水として今も利用されている。ちなみに建設の



■図1—辰巳用水縦断面図



■図2—逆サイフォンの原理と金沢の導水管路

功労者板屋兵四郎とその配下は、竣工後に藩主の命で処刑されたとの逸話が地元に残っている。

金沢城内のサイフォン管路は、後の兼六園改良工事で土砂を掘り返した際に水路管が掘り出され、現在は消失してしまった。掘り出された石管は市内のいたるところに記念碑として置かれている。

7—大切な文化遺産の価値を伝える

前田藩の事業として大切に維持管理されてきた兼六園と辰巳用水は、明治時代に入ると自治体と地域住民に引継がれた。造形美のなかに工夫を凝らして様々な機能を隠した兼六園は生きた文化財である。近年では作庭時の意匠や姿が詳細に研究され、出所起源をそのまま受け継ぎ復元可能とするために200本のクローン銘木を育てるなど、関係者による絶え間ない努力が続けられている。一方、辰巳用水では、古くから地域住民が交代で水番を立て、底さらいや暗渠部の修復を繰り返してきた。今も辰巳用水土地改良区や地域の人々の献身的な努力によって守られている。

今の兼六園は100年前の姿ではないかもしれない。しかしひとつひとつの樹木のもつ意味が失われないように、全体の4割以上は自然仕立てで剪定をせず、専属庭



■写真10—板屋兵四郎が築かれた兼六園内の板屋神社別院社殿脇にサイフォンの石管が置かれている



■写真11—隔週で行われる曲水の玉石についた泥を落とす作業中の風影

師5名を中心に現在ある姿がしっかりと管理されている。かつて稲の育成や自然環境の移り変わりを藩主に教育するための施設でもあった兼六園。周辺環境によって直ぐに姿を変える庭園は環境問題の教材でもある。「子供たちに本当の姿を伝え、意義を教えたい。単なる庭でなく、大切な文化遺産の価値を伝える教養の学び舎でありたい。」金沢城・兼六園管理事務所の言葉が耳に響いた。街の象徴的存在であり市民全ての誇りである兼六園が、日本のあるべき美しい姿と精神をいつまでも伝え続ける存在であってほしい。

<参考文献>

- 1) 『兼六園保存対策調査報告書(要約版)』石川県兼六園管理事務所(1999.3)
- 2) 『作庭記』田村剛(1955.5)相模書房
- 3) 『兼六園全史』兼六園全史編纂委員会 石川県公園事務所(1976.12)兼六園観光協会
- 4) 『兼六園の今昔』下郷松(1999.3)中日新聞社
- 5) 『特別名称兼六園—その歴史と文化—本編/資料編』特別名称兼六園—その歴史と文化—編纂委員会(1997.2)橋本確文堂
- 6) 『風水の本』工藤徳治(1998.12)学習研究社

<取材協力・資料提供>

- 1) 辰巳用水土地改良区
- 2) 石川県金沢市・兼六園管理事務所
- 3) 成興閣
- 4) 石川県立伝統産業工芸館

(写真提供:P12上、写真2、6、7、8、9、10、11、筆者写真1、3、4、5、塚本敏行)

図1: 参考文献5より
図2: 参考文献3より